

# 自然体験の場としてのキャンプ場利用者の意識と行動

## Visitors' Consciousness and Behavior at a Camp Site for Nature-based Experience Activities

高 橋 進  
Susumu TAKAHASHI

### 概要

キャンプ場は、都市部などで身近な自然が喪失していくなかであって、自然とのふれあいの機会を提供する場として重要である。特に子どもの自然との接触の場として、キャンプ場は以前にも増して重要な役割となっている。本研究では、アンケート調査により、キャンプ場利用者の自然とのふれあいの場としての利用実態を把握した。この結果、(A) 自然志向が強く、自然体験のために来訪する利用者、(B) キャンプ活動自体に関心のある利用者、(C) グループ内での親睦を図ることを目的とする利用者、の3タイプの存在が明らかになった。また、子ども同伴のほうが、同伴していないグループよりも、自然や不便さを求める割合が高い傾向があることも明らかになった。

**キーワード：**環境教育、キャンプ場、自然体験活動、自然とのふれあい、野外レクリエーション、利用者意識

### Abstract

Camp sites provide important sites and opportunities for people to interact with nature at a time of reduction of such opportunities in urban areas because of the loss of nature existing close to areas of human habitation. They play an increasingly important role today in fostering children's connection to nature when compared to the past. This study examined the actual situation of campers' consciousness and behavior in interacting with nature, through analysis of questionnaires to visitors. The results of this study revealed three types of campers: type A campers were there to experience nature, and were more strongly oriented towards nature than the other types; type B campers were more interested in the activity of camping; type C campers' purpose was to promote mutual friendship. The results also revealed that visitors with children had a stronger tendency to seek nature and avoid modern conveniences than those without children.

**Keywords:** environmental education, camp site, nature-based experience activities, interaction with nature, outdoor recreation, visitors' consciousness

## 目次

1. はじめに
2. 研究の方法
3. 結果
  - 3.1 利用者属性
  - 3.2 利用者の目的意識
  - 3.3 キャンプ村の利用
  - 3.4 キャンプ場での行動と自然地での滞在意識
4. 利用者の目的意識と行動による考察
  - 4.1 箱根訪問の目的
  - 4.2 キャンプ場利用者の自然志向比較
5. 子ども同伴の有無による自然志向考察
  - 5.1 子ども同伴の有無
  - 5.2 訪問目的などの意識の比較
  - 5.3 キャンプ場での行動の比較
6. 総合考察とまとめ
7. おわりに

## 1. はじめに

1972年に開催された「国連人間環境会議」で採択された「世界環境行動計画」において環境教育が取り上げられて以来、環境教育の重要性が多くの場で指摘されてきた。今日では、2002年に国連によって「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」（2005年～2014年）が採択され、環境教育に対する社会的要請も一層高まっている（井上2009、降旗ら2009）。その中で、自然保護教育あるいは自然体験学習は、19世紀後半の欧米での教育運動以来展開され、日本でも自然観察会などとして各地で実施されてきた（伊東ら2009、降旗ら2009）。しかし、現代社会では自然とふれあう場と機会が喪失しており、さまざまな自然余暇の需要が増大している（高橋2010）。特に、身近な自然も喪失してきた現在では、昆虫を捕まえるなどの自然体験は年々減少傾向にあり（国立青少年振興機構2011）、自然とのふれあいと、これを幼児期から体験することは、以前にも増して求められるようになってきている。政府でも、「環境保全のための意欲の増進及び環境教育

の推進に関する法律（環境保全活動・環境教育推進法）」（2003年）を2011年に改正し、法律名称も「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律（環境教育等促進法）」として、自然体験等の機会の場の提供の仕組み導入を充実するための規定を定めた。

キャンプ場は、この自然体験の機会を提供する場として重要であり、さまざまなプログラムが展開されてきた。しかし一方で、キャンプ場において実施される野外活動には、自然とのふれあいだけでなく、集団訓練やレクリエーションの場としての利用やそのためのプログラムも多い（佐野 1980、宮本 2008、西島 2008）。このため既往研究には、人間・精神形成などにおけるキャンプ活動の影響に関する研究（たとえば、高山 2009、小田ら 2010）やキャンプ場利用者のゴミなどの環境意識に関する研究（たとえば、永吉ら 2001、杉浦ら 2005）などが多い。

キャンプ場を自然体験の場としてとらえた先行研究においても、中野ら（1991）、遠藤（1994）、岡村（2000ほか）、James et al.（2008）、あるいは西島（2008）などのように、環境教育プログラム（野外体験プログラム）の提供側とその受け手に関する研究が中心である。また、西島（2008）や宮本（2008）などは、「日常生活やレジャーとしての自然とのふれあい」と「野外活動や環境教育としての自然とのふれあい」を比較して論じているものの、前者は前述のとおり教育プログラムの一環として参加した教員志望の学生を対象としたものであり、後者では実際の利用者意識や行動までは研究対象としていない。さらに、幼少期からの自然体験の重要性が指摘され、関連する多くの先行研究もあり（井上 2009）、児童期の自然体験に関する研究も多い（たとえば、高山ら 2007、岡本 2010、河内 2011、吉野ら 2011）。また、一般のキャンプ場利用者の特性に関する研究も、キャンプ場整備（鈴木ら 1994）や利用者の収容力と混雑感、植生影響（愛甲ら 1993、1998ほか）などである。今日ますます子どもの自然とのふれあいの場としての役割が増大しているキャンプ場（James et al. 2008）における、教育プログラムに参加していない一般の保護者や児童の自然体験意識・行動についての先行研究は見当たらない。

一般に環境教育として行われている自然とのふれあい活動の中には、レジャー（レクリエーション）としての活動と内容的に区別がつかないものも多い（宮本 2008）。また、キャンプ場などでの野外教育は、環境教育と冒険教育という側面も有している（岡村 2000）ことから、一般利用者がキャンプ場を利用する際の自然志向性とその実態を把握することは、自然体験の場としてのキャンプ場を考えていくうえで重要である。

そこで本研究においては、まず一般的なキャンプ場利用者が実際に自然とのふれあい、自然体験などを求めてキャンプ場利用をしているのか、すなわちキャンプ場利用者の自然志向性について明らかにする。さらに、幼児・児童の自然体験の観点から、子どもを同伴したキャンプ場利用者と同伴していない利用者との間で、意識的・無意識的にかかわらず、自然志向が異なるかどうかを明らかにする。



種の宿泊エリアがある。ケビン棟エリアには貸別荘タイプのケビン棟（以下、「ケビン」）が36棟、オートキャンプエリア（以下、「オートキャンプ」）は25区画、フリーテントサイト（以下、「フリーテント」）は20区画である（図1）。テラス付木造ログハウス風のケビンは、ベッド室とリビングダイニングの2LDKタイプである。バス、トイレのほか、ダイニングにはカウンターキッチンが備えられており、食器や炊飯器なども完備している。オートキャンプは、他のゾーンと異なり車の進入が可能なエリアで、キャンピングカーあるいはテント利用のために1区画の面積は55m<sup>2</sup>とやや広めだ。各区画には、野外炉（かまど）が設置されているが、4区画には電源コンセントも付帯している。フリーテントは、利用者がそれぞれ各自でテントを持ち込むもので、1区画面積が25m<sup>2</sup>である。それぞれの宿泊施設（宿泊形態）ごとの利用者数と日帰り利用者数は表1のとおりである<sup>2)</sup>。

調査は、2009年7月26日から10月10日の間に、キャンプ村受付において利用者（グループの場合にはグループ代表者）にアンケート票を配布して回収した。アンケートの質問項目

表1 キャンプ村利用者数（2009年）

| 施設  |            | 利用者    |        | アンケート回答者 |        |
|-----|------------|--------|--------|----------|--------|
| 宿 泊 | ケビン棟       | 18,678 | 73.8%  | 206      | 67.1%  |
|     | オートキャンプサイト | 3,195  | 12.6%  | 74       | 24.1%  |
|     | フリーテントサイト  | 3,068  | 12.1%  | 24       | 7.8%   |
|     | 計          | 24,941 | 98.5%  | 304      | 99.0%  |
| 日帰り |            | 380    | 1.5%   | 3        | 1.0%   |
| 総 数 |            | 25,321 | 100.0% | 307      | 100.0% |

注) アンケート回答者数は、宿泊利用施設に記入のあったもの

は、研究目的のキャンプ場利用者の自然志向意識と行動を探るための以下の項目などである。

- ・基礎的項目：回答者属性（性別、年齢、居住地（県名）、人数、子ども同伴の有無、グループ種類
- ・箱根訪問：訪問目的（複数回答）、主要な目的（単一回答）、移動手段（複数回答）、滞在日数、訪問回数
- ・キャンプ村：選択理由（複数回答）、利用回数、滞在日数、宿泊施設の種類の種類、ケビン設備
- ・意識と行動：キャンプ村内でもっとも長時間滞在した場所（単一回答）、そこでの行動（複数回答）、その中でもっとも中心的な行動（単一回答）、自然の中の1か所で長時間滞留することについての意識（単一回答）、できない理由（複数回答）

調査結果は、キャンプ目的や宿泊形態など、あるいは子ども同伴の有無による自然志向性の違いなどを考察するため、 $\chi^2$ 検定による項目間の独立性などの検定・解析をした。

### 3. 結果

#### 3.1 利用者属性

アンケート票は、330枚が回収された（回収率36.7%）<sup>3)</sup>。回答者は、男性57.4%、女性42.6%であり、平均年齢は40.2歳だった。利用者の居住地は、地元神奈川県が大半（68.2%）で、以下、東京都（16.7%）、静岡県（4.8%）、千葉県（4.2%）、埼玉県（1.5%）など近隣県が中心であるが、夏休み期間中でもあり長野県のほか、宮城県、愛知県、三重県、岡山県、広島県など遠方からの利用者もわずかながらいた。グループの種類は、家族・親せきが大半（68.5%）で、友人・知人（19.4%）、職場グループ（4.2%）、学校・地域その他グループ（3.6%）などだった。グループの人数は、平均6.3人で、4人がもっとも多く（31.8%）、5人（19.4%）、6人（12.7%）、7～10人（12.1%）と続き、11人以上も10.3%だった。一方、3人（8.5%）、2人（3.6%）、1人（0.9%）の少人数は比較的少なかった。また、72.4%が子ども（中学生以下）を同伴していた。

#### 3.2 利用者の目的意識

箱根への訪問回数は、前述のとおり首都圏から近い国立公園ということもあり、初回7.9%、2回目7.6%、3～5回目24.8%、6回目以上59.1%と、リピーターが多かった。6回目以上には、およそ30回、あるいは50回以上など数多く訪問しているものもいた（自由記入欄）。箱根での移動手段は、ほとんどがマイカー（レンタカーを含む）利用（90.9%）で、滞在日数の平均は2.3日だった。

箱根への訪問目的（以下、「箱根訪問目的」）（複数回答）で

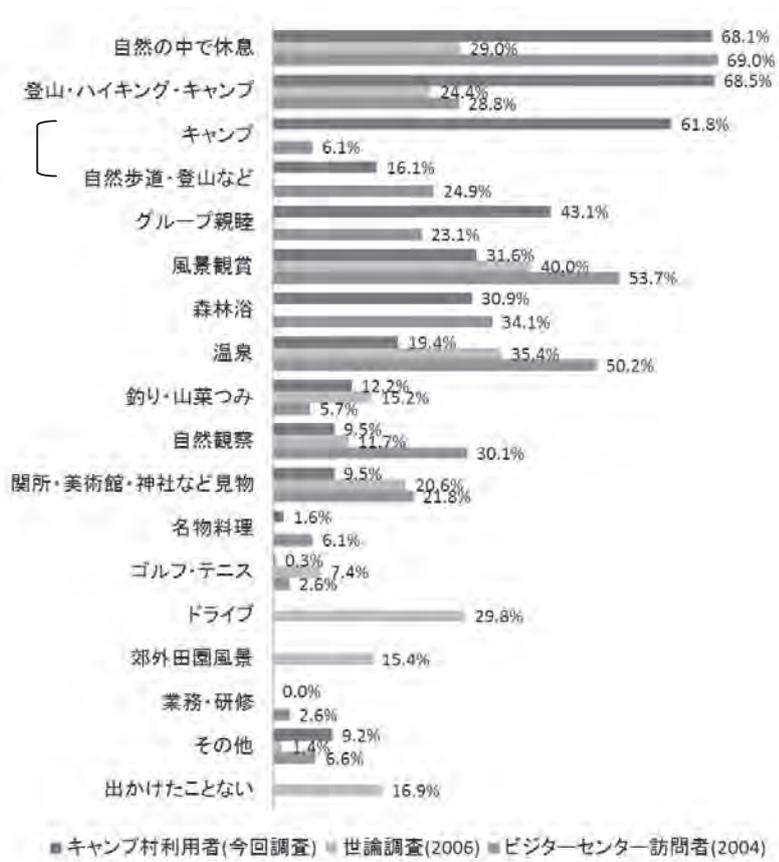


図2 箱根訪問目的比較

は、「自然の中で休息するため」(以下、「自然休息」)がもっとも多く(68.1%)、「キャンプを楽しむため」(以下、「キャンプ」)(61.8%)、「職場や家族等のグループ親睦のため」(以下、「親睦」)(43.1%)と続く(図2)。このうち、もっとも中心となる箱根訪問目的(以下、「箱根主要訪問目的」)を一つあげてもらった(単一回答)ところ、「キャンプ」がもっとも多く(41.1%)、以下「親睦」(22.8%)、「自然休息」(17.2%)と順位が入れ替わった。

ホテルなど他の宿泊施設ではなく、キャンプ村を宿泊施設として選んだ目的・理由(以下、「キャンプ村選択理由」)(複数回答)をみる。結果は、「自然の中で長時間過ごすため」(以下、「自然の中で過ごす」)(60.5%)、「周囲の自然が良好、静かなため」(以下、「周囲の自然が良好」)(44.1%)といった自然とのふれあいに関連した割合が高く、以下「経費が安い」(以下、「経費安い」)(43.1%)、「共同炊事などを通じての親睦のため」(以下、「共同による親睦」)(32.9%)と続いた。さらに、「ケビンが気に入っている」、また少数ながら「不便さを体験するため」や「他の施設が満室のため」などもあった(表2)。

表2 キャンプ村選択理由

|                  | タイプA |       | タイプB |       | タイプC |       | その他 |       | 全体  |       |               |
|------------------|------|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|-----|-------|---------------|
| 自然の中で長時間過ごすため    | 43   | 62.3% | 85   | 68.5% | 45   | 50.6% | 11  | 50.0% | 184 | 60.5% | 2**           |
| 周囲の自然が良好、静かなため   | 40   | 58.0% | 49   | 39.5% | 36   | 40.4% | 9   | 40.9% | 134 | 44.1% | 1*、3*         |
| 経費が安い            | 27   | 39.1% | 60   | 48.4% | 38   | 42.7% | 6   | 27.3% | 131 | 43.1% |               |
| 共同炊事などを通じての親睦のため | 9    | 13.0% | 37   | 29.8% | 48   | 53.9% | 6   | 27.3% | 100 | 32.9% | 1**、2***、3*** |
| ケビンが気に入っているため    | 22   | 31.9% | 16   | 12.9% | 33   | 37.1% | 6   | 27.3% | 77  | 25.3% | 1**、2***      |
| 都会生活から離れるため      | 14   | 20.3% | 28   | 22.6% | 16   | 18.0% | 6   | 27.3% | 64  | 21.1% |               |
| 何もしないでゆっくり過ごすため  | 11   | 15.9% | 16   | 12.9% | 12   | 13.5% | 2   | 9.1%  | 41  | 13.5% |               |
| 散策・登山の拠点のため      | 7    | 10.1% | 8    | 6.5%  | 12   | 13.5% | 2   | 9.1%  | 29  | 9.5%  |               |
| 同行者の選択           | 6    | 8.7%  | 14   | 11.3% | 9    | 10.1% | 0   | 0.0%  | 29  | 9.5%  |               |
| 不便さを体験するため       | 4    | 5.8%  | 10   | 8.1%  | 5    | 5.6%  | 2   | 9.1%  | 21  | 6.9%  |               |
| 他の施設が満室のため       | 1    | 1.4%  | 5    | 4.0%  | 2    | 2.2%  | 0   | 0.0%  | 8   | 2.6%  |               |
| その他              | 9    | 13.0% | 10   | 8.1%  | 9    | 10.1% | 6   | 27.3% | 34  | 11.2% |               |

注) タイプA: 自然ふれあいタイプ、タイプB: キャンプ活動タイプ、タイプC: グループ親睦タイプ  
 1 = タイプAとタイプBの間、2 = タイプBとタイプCの間、3 = タイプAとタイプCの間の比較  
 検定結果 \*\*\*: p < 0.001、\*\*: p < 0.01、\*: p < 0.05、+: p < 0.1 (以下同様)

### 3.3 キャンプ村の利用

キャンプ村の利用回数は、初回が51.2%と最も多く、2回目15.5%、3~5回目16.4%、6回目以上11.8%だった。滞在日数は、日帰りはわずか0.9%であり、1泊2日が大半(67.9%)で、2泊3日は19.1%、3泊以上は2.4%と少なかった。なお、キャンプ村利用者実績とアンケート回答者の宿泊形態別と日帰り利用の割合について $\chi^2$ 検定で比較したところ、有意差は認められなかった。このキャンプ村を再び利用(再訪)したいと思うものは87.6%で、再訪したくないものはわずか0.9%(どちらともいえない10.0%、不明1.5%)だった。

キャンプ村の3種の宿泊形態の回答者割合は、ケビン67.8%、オートキャンプ24.3%、フリーテント7.9%だった。

回答者の利用期は、夏休み期間中の7～8月が68.1%、夏休み後の9～10月は31.9%だった。この2時期の回答者の属性等について $\chi^2$ 検定の結果、グループ人数、種類、居住地などに有意差は認められず、調査期間中の夏休みによる影響はないと考えられる。

### 3.4 キャンプ場での行動と自然地での滞在意識

キャンプ村内滞在中にもっとも長時間にわたって滞在した場所（以下、「長時間滞在場所」）を1か所選択してもらったところ、ほとんど（80.9%）が「ケビンまたはテント内」（以下、「ケビン・テント内」）で過ごし、次いで「野外キャンプエリアまたはバーベキューガーデン」（以下、「野外キャンプエリア」）、「湖岸や樹林内」（以下、「湖岸・樹林」）だった（表3）。それぞれの長時間滞在場所での行動

表3 長時間滞在場所

|         | タイプA     | タイプB     | タイプC     | その他      | 全体        |           |
|---------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|
| テント・ケビン | 60 87.0% | 89 71.8% | 79 88.8% | 18 81.8% | 246 80.9% | 1*、2**    |
| キャンプエリア | 2 2.9%   | 29 23.4% | 5 5.6%   | 2 9.1%   | 38 12.5%  | 1***、2*** |
| 湖岸・樹林   | 7 10.1%  | 5 4.0%   | 5 5.6%   | 1 4.5%   | 18 5.9%   |           |
| その他     | 0 0.0%   | 1 0.8%   | 0 0.0%   | 1 4.5%   | 2 0.7%    |           |

表4 長時間行動（上段）と中心的長時間行動（下段）

|       | タイプA     | タイプB      | タイプC     | その他      | 全体        |        |
|-------|----------|-----------|----------|----------|-----------|--------|
| 食事    | 57 82.6% | 111 89.5% | 81 91.0% | 19 86.4% | 268 88.2% |        |
| 会話    | 54 78.3% | 86 69.4%  | 72 80.9% | 15 68.2% | 227 74.7% | 2+     |
| 散策    | 23 33.3% | 38 30.6%  | 17 19.1% | 2 9.1%   | 80 26.3%  | 2+, 3* |
| ゲーム   | 16 23.2% | 21 16.9%  | 22 24.7% | 9 40.9%  | 68 22.4%  |        |
| 読書    | 9 13.0%  | 12 9.7%   | 6 6.7%   | 2 9.1%   | 29 9.5%   |        |
| 昼寝    | 7 10.1%  | 11 8.9%   | 7 7.9%   | 2 9.1%   | 27 8.9%   |        |
| 釣り    | 2 2.9%   | 5 4.0%    | 6 6.7%   | 1 4.5%   | 14 4.6%   |        |
| 思索    | 2 2.9%   | 4 3.2%    | 4 4.5%   | 1 4.5%   | 11 3.6%   |        |
| 何もしない | 3 4.3%   | 5 4.0%    | 0 0.0%   | 2 9.1%   | 10 3.3%   |        |
| 仕事    | 0 0.0%   | 1 0.8%    | 1 1.1%   | 0 0.0%   | 2 0.7%    |        |
| その他   | 4 5.8%   | 9 7.3%    | 3 3.4%   | 4 18.2%  | 20 6.6%   |        |

|       | タイプA     | タイプB     | タイプC     | その他     | 全体        |           |
|-------|----------|----------|----------|---------|-----------|-----------|
| 食事    | 28 40.6% | 89 71.8% | 41 46.1% | 9 40.9% | 167 54.9% | 1***、2*** |
| 会話    | 23 33.3% | 16 12.9% | 34 38.2% | 5 22.7% | 78 25.7%  | 1***、2*** |
| 散策    | 9 13.0%  | 8 6.5%   | 4 4.5%   | 2 9.1%  | 23 7.6%   | 3+        |
| ゲーム   | 2 2.9%   | 3 2.4%   | 2 2.2%   | 1 4.5%  | 8 2.6%    |           |
| 釣り    | 1 1.4%   | 1 0.8%   | 5 5.6%   | 0 0.0%  | 7 2.3%    | 2+        |
| 読書    | 3 4.3%   | 0 0.0%   | 1 1.1%   | 0 0.0%  | 4 1.3%    | 1+        |
| 何もしない | 1 1.4%   | 2 1.6%   | 0 0.0%   | 1 4.5%  | 4 1.3%    |           |
| その他   | 2 2.9%   | 5 4.0%   | 2 2.2%   | 4 18.2% | 13 4.3%   |           |

（以下、「長時間行動」）（複数回答）と、その中でもっとも時間を費やした中心的な行動（以下、「中心的長時間行動」）（単一回答）は、食事（準備、後片付けを含む）（以下、「食事」）、会話、散策、ゲームなどだった（表4）。

次に、国立公園や自然の地域において、読書や会話程度で“特別な行動を伴わずに1か所に長時間（おおむね2時間以上）滞留”すること（以下、「自然地長時間滞留」）を好むかについて調べた。結果は、「好んで実施している」（以下、「好んで実施」）のは38.8%、「できればやってみたいがなかなかできない」（以下、「できない」）は42.1%ではあるが、「好まない」はわずか9.5%だった。

自然地長時間滞留ができない理由（複数回答）は、「旅行日程上余裕がない」とするものももっとも多く（50.6%）、「出かける時間的余裕がない」（31.6%）、「できるだけ多くの場所に行きたい」（24.7%）などだった（表5）<sup>4)</sup>。

表5 自然地長時間滞留ができない理由

|              | タイプA |       | タイプB |       | タイプC |       | その他 |       | 全体 |       |        |
|--------------|------|-------|------|-------|------|-------|-----|-------|----|-------|--------|
| 旅行日程余裕ない     | 17   | 50.0% | 32   | 45.7% | 26   | 60.5% | 5   | 41.7% | 80 | 50.6% |        |
| 出かける時間的余裕ない  | 10   | 29.4% | 23   | 32.9% | 16   | 37.2% | 1   | 8.3%  | 50 | 31.6% |        |
| 多くの場所に行きたい   | 14   | 41.2% | 12   | 17.1% | 9    | 20.9% | 4   | 33.3% | 39 | 24.7% | 1**、3+ |
| じっとしているのが苦手  | 10   | 29.4% | 9    | 12.9% | 6    | 14.0% | 3   | 25.0% | 28 | 17.7% | 1*、3+  |
| つまらない（飽きる）   | 4    | 11.8% | 7    | 10.0% | 8    | 18.6% | 3   | 25.0% | 22 | 13.9% |        |
| 同行者好まない      | 6    | 17.6% | 6    | 8.6%  | 3    | 7.0%  | 3   | 25.0% | 18 | 11.4% |        |
| 日焼け・虫さされ気になる | 4    | 11.8% | 6    | 8.6%  | 2    | 4.7%  | 2   | 16.7% | 14 | 8.9%  |        |
| 出かける金銭的余裕ない  | 4    | 11.8% | 5    | 7.1%  | 2    | 4.7%  | 0   | 0.0%  | 11 | 7.0%  |        |
| お金をかけてもったいない | 1    | 2.9%  | 2    | 2.9%  | 4    | 9.3%  | 0   | 0.0%  | 7  | 4.4%  |        |
| 読書など屋外の必要ない  | 1    | 2.9%  | 2    | 2.9%  | 2    | 4.7%  | 1   | 8.3%  | 6  | 3.8%  |        |
| その他          | 1    | 2.9%  | 7    | 10.0% | 2    | 4.7%  | 2   | 16.7% | 12 | 7.6%  |        |

#### 4. 利用者の目的意識と行動による考察

##### 4.1 箱根訪問の目的

キャンプ村利用者の箱根訪問目的（複数回答）は、前述のとおり「自然休息」がもっとも多かった（68.1%）。一方、内閣府の世論調査<sup>5)</sup>によると、国民が国立公園など自然の多いところに出かけた目的（複数回答）では、「海や山の美しい自然の風景を楽しむため」の割合が40.0%ともっとも高く、以下「温泉に入ってくつろぐため」（35.4%）、「ドライブを楽しむため」（29.8%）、「自然の中で休息するため」（29.0%）などの順となっている。また、キャンプ村に近い「箱根ビジターセンター」来訪者に対する調査結果（高橋 2004）では、「自然の中で休息するため」がもっとも多く（69.0%、複数回答）、次いで「風景を楽しむため」（53.7%）、「温泉に入ってくつろぐため」（50.2%）などで、「キャンプを楽しむ」は6.1%とわずかだった。

調査の選択肢や時期が異なるため、単純な比較はできないが<sup>6)</sup>、キャンプ村利用者は一般国民や箱根ビジターセンター利用者と比較すると、周遊型の観光よりも、キャンプやグ

ループ親睦を目的とする傾向が強いが、必ずしも登山や自然観察など自然とのふれあい目的が強いわけでもない(図2)。

これらの箱根訪問の目的を共通性によりグループ化するため、箱根訪問目的(複数回答)の「その他」を除く回答を因子分析し、共通因子を抽出した。この結果、第3因子までを抽出した(表6)。バリマックス回転後の各因子の寄与率は必ずしも高くはないが、それぞれの因子の内容には共通性が認められ、説明可能

と認めた。第1因子は、森林浴や登山・散策、自然の中での休息、あるいは自然観察や風景観賞、名所・美術館見学のような「自然・観賞」である。第2因子は、温泉入浴、名物料理、釣り・山菜摘み、さらにはグループ親睦など、どちらかという旧来型の団体観光や実利の要素を含んだ「親睦・体験」である。第3因子は、キャンプ活動そのものを楽しむ「キャンプ」である。

## 4.2 キャンプ場利用者の自然志向比較

### 4.2.1 訪問目的によるグループ分類と比較

次に、キャンプ場利用者の自然志向を考察するため、前述の箱根訪問目的の因子に基づき利用者を3グループ(以下、「因子グループ」)に分類し、自然ふれあい行動や自然の中での滞留意識などに各タイプ間での変化があるかを考察した。

回答者のグループ化は、箱根主要訪問目的を各因子グループに当てはめた。それぞれの因子に該当する回答数と割合をみると、第1因子の「自然・観賞」に属する(以下、「自然ふれあいタイプ」)回答数は69、割合は22.7%で、以下同様に第2因子「親睦・体験」(以下、「グループ親睦タイプ」)は89(29.3%)、第3因子「キャンプ」(以下、「キャンプ活動タイプ」)は124(40.8%)、「その他」は22(7.2%)となった<sup>7)</sup>。

キャンプ場選択理由は、前掲表2のとおり「自然の中で過ごす」(60.5%)といういわば自然志向性の強い理由がもっとも多かった。タイプ間での比較では、「自然の中で過ごす」、「周囲の自然が良好」、「共同による親睦」、および「ケビンが気に入っているため」で有意差が認められた。また、宿泊施設では、すべての施設形態で有意差が認められた(表7)。

「自然の中で過ごす」を選定理由とした割合は、キャンプ活動タイプでもっとも高く、低いグループ親睦タイプと有意差が認められた( $p < 0.01$ )。また、「周囲の自然が良好」として選定したのは自然ふれあいタイプの割合が高く、他のタイプと有意差が認められた

表6 箱根訪問目的の因子分析結果

| 変数名      | 因子 No.1  | 因子 No.2  | 因子 No.3  |
|----------|----------|----------|----------|
| 森林浴      | 0.522306 | -0.08558 | -0.11639 |
| 散策・登山    | 0.486968 | 0.006047 | -0.0368  |
| 自然観察     | 0.48462  | -0.07284 | 0.068979 |
| 風景観賞     | 0.410573 | -0.05964 | -0.27768 |
| 名所・美術館見学 | 0.311162 | 0.045245 | -0.07649 |
| 自然の中で休息  | 0.272726 | -0.11626 | -0.23999 |
| 温泉入浴     | 0.048082 | 0.339003 | 0.059851 |
| 名物料理     | -0.06439 | 0.304947 | -0.07318 |
| 釣り・山菜摘み  | 0.012031 | 0.25837  | -0.02556 |
| 親睦       | 0.090056 | -0.24657 | -0.07989 |
| キャンプ     | -0.05189 | -0.0251  | 0.376639 |

注) バリマックス回転後、網掛けは各因子関連変数

(いずれも  $p < 0.05$ )。

宿泊施設（宿泊形態）からみると、キャンプ活動タイプはケビンを選択した割合は他タイプよりも有意に低く ( $p < 0.01$ )、逆にオートキャン

表7 宿泊施設（宿泊形態）

|         | タイプA     | タイプB     | タイプC     | その他      | 全体        |           |
|---------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|
| ケビン棟    | 58 84.1% | 51 41.1% | 79 88.8% | 18 81.8% | 206 67.8% | 1***、2*** |
| オートキャンプ | 8 11.6%  | 53 42.7% | 10 11.2% | 3 13.6%  | 74 24.3%  | 1***、2*** |
| フリーテント  | 3 4.3%   | 20 16.1% | 0 0.0%   | 1 4.5%   | 24 7.9%   | 1*、2***   |

表8 自然地長時間滞留意識

|          | タイプA     | タイプB     | タイプC     | その他     | 全体        |  |
|----------|----------|----------|----------|---------|-----------|--|
| 好んで実施    | 30 43.5% | 43 34.7% | 37 41.6% | 8 36.4% | 118 38.8% |  |
| なかなかできない | 27 39.1% | 55 44.4% | 38 42.7% | 8 36.4% | 128 42.1% |  |
| 好まない     | 6 8.7%   | 13 10.5% | 6 6.7%   | 4 18.2% | 29 9.5%   |  |
| わからない    | 6 8.7%   | 13 10.5% | 7 7.9%   | 2 9.1%  | 28 9.2%   |  |
| その他      | 0 0.0%   | 0 0.0%   | 1 1.1%   | 0 0.0%  | 1 0.3%    |  |

プおよびフリーテントを選択した割合は有意に高かった（オートキャンプではいずれも  $p < 0.01$ 、フリーテントでは自然ふれあいタイプとは  $p < 0.01$ 、グループ親睦タイプとは  $p < 0.05$ )（表7）。

キャンプ場での長時間滞在場所を各タイプ間で比較すると、「ケビン・テント内」と「野外キャンプエリア」でタイプ間の有意差が認められた（表3）。キャンプ活動タイプは、ケビン・テント内で過ごす割合が他のタイプよりも有意に低く（自然ふれあいタイプとは  $p < 0.01$ 、グループ親睦タイプとは  $p < 0.05$ ）、逆に野外キャンプエリアで過ごす割合が他タイプよりも有意に高かった（いずれも  $p < 0.01$ ）。自然志向性の指標とも考えられる「湖岸・樹林」については、自然ふれあいタイプの割合がもっとも高く（10.1%）、キャンプ活動タイプがもっとも低かった（4.0%）が、有意差は認められなかった。

その長時間滞在場所での行動（複数回答）（長時間行動）については、散策することについて、グループ親睦タイプの割合が他のタイプよりも低かった（自然ふれあいタイプとは  $p < 0.05$ 、キャンプ活動タイプとは  $p < 0.1$ )（表4）。

また、自然地長時間滞留の意識については各タイプ間での有意差は認められなかったが、キャンプ活動タイプでは好んで実施している割合がもっとも低く、好まないとする割合がもっとも高かった（表8）。自然地長時間滞留ができない、あるいは好まない理由では、「旅行日程上余裕がない」と「出かける時間的余裕がない」の割合は各タイプとも高く有意差は認められなかったが、自然ふれあいタイプの割合がもっとも低かった（表5）。一方、「できるだけ多くの場所に行きたい」では、自然ふれあいタイプが他グループよりも高かった（キャンプ活動タイプとは  $p < 0.05$ 、グループ親睦タイプとは  $p < 0.1$ ）。また、「じっとしているのが苦手・落ち着かない」とするものの割合も自然ふれあいタイプが高かった（キャンプ活動タイプとは  $p < 0.01$ 、グループ親睦タイプとは  $p < 0.1$ ）。

#### 4.2.2 自然ふれあいタイプの自然志向性

国立公園内の箱根に主に「自然の中で休息」するなどの目的で訪問したキャンプ場利用

者（自然ふれあいタイプ）は、そのほとんどがケビンに宿泊した（84.1%）。その理由（キャンプ村選択理由）は、「周囲の自然が良好」だからであり（58.0%）、その割合は他タイプよりも有意に高い（ $p < 0.05$ ）。キャンプ場滞在中の長時間行動は、食事や会話が多いが、他タイプよりも湖岸や樹林内で長時間を過ごした（長時間滞在場所）ものの割合が高く（10.1%）、行動も散策をした割合がキャンプ活動タイプと同様比較的高い（33.3%）。自然地の1か所に長時間滞留（自然地長時間滞留）することを好んで実施している割合は、他目的利用者よりもやや高いことから、箱根訪問目的のとおりに本タイプの自然志向は意識や行動に表れているといえよう。また、選定理由として「何もしないでゆっくりするため」とする割合も3タイプの中では高く、これは滞在中の長時間行動でも読書や昼寝の割合がもっとも高いことにも表れている（中心的長時間行動では「読書」はキャンプ活動タイプとの間で  $p < 0.05$ （Yates 補正後  $p < 0.1$ ）の有意差）。

#### 4.2.3 キャンプ活動タイプの自然志向性

一方、「キャンプを楽しむ」ことを箱根訪問主要目的とするキャンプ活動タイプの利用者では、ケビン利用の割合が他タイプの1/2以下で有意に低く（ $p < 0.01$ ）、オートキャンプとフリーテントの割合は有意に高い（フリーテントの自然ふれあいタイプとの間で  $p < 0.05$ 、他は  $p < 0.01$ ）。また、野外エリアでの長時間滞在の割合が他より有意に高い（ $p < 0.01$ ）。そこでの中心的行動では、食事に長時間を費やした割合が有意に高い（ $p < 0.01$ ）。しかし、中心的行動として会話をあげる割合は有意に低い（ $p < 0.01$ ）。湖岸や樹林内での散策やのんびりと会話あるいはゲームをするよりも、野外キャンプエリアでのバーベキューなど食事行動に重点を置いているようである。意外にも、自然地長時間滞留を好んで実施している割合は他目的利用者よりも少なく、好まない割合が他よりも高い。また、キャンプ活動タイプ利用者のキャンプ村選択理由では、「自然の中で過ごす」としたものの割合が比較的高いにもかかわらず、「周囲の自然が良好」としたものの割合は低く、自然ふれあいタイプと有意差（ $p < 0.05$ ）があった。すなわち、キャンプ活動タイプ利用者は、自然の中で過ごすためにキャンプ場を利用しているものの、それは自然とのふれあいや自然の中での滞在・休息目的のためというよりは、むしろキャンプ活動そのものを楽しむためと考えられる。

#### 4.2.4 グループ親睦タイプの自然志向性

「グループでの親睦」などを箱根主要訪問目的とするグループ親睦タイプは、ケビンとオートキャンプに宿泊して、ケビン・テント内で長時間滞在し、おもに食事に長時間を費やす（中心的長時間行動）とするそれぞれの割合、および自然地長時間滞留意識は、自然ふれあいタイプとほぼ同様である。また、長時間行動では会話の割合が3者の中でもっとも高い。

キャンプ村選択理由でも箱根訪問目的と同様に、「共同による親睦」が有意に高い（ $p <$

0.01) ことから、ケビンや野外エリアで食事や会話をして長時間を過ごし、親睦を深めていると考えられる。しかし、「自然の中で長時間過ごす」ためとするキャンプ場選択理由の割合はもっとも低く（キャンプ活動タイプとは  $p < 0.01$ ）、湖岸・樹林内に滞在する割合もキャンプ活動タイプに近く、自然ふれあいタイプよりも低い。また特に、長時間行動での散策の割合は、他のタイプよりも低い（複数回答で、自然ふれあいタイプとは  $p < 0.05$ 、キャンプ活動タイプとは  $p < 0.1$ 、中心的長時間行動（単一回答）では、自然ふれあいタイプと  $p < 0.1$ ）。これらから、グループ親睦タイプのキャンプ場利用者にとっては、自然は必ずしも重要ではなく、自然体験などの自然志向性は比較的低いことが明らかである。

## 5. 子ども同伴の有無による自然志向比較

### 5.1 子ども同伴の有無

前述のとおり、回答者の 72.4% が子ども（中学生以下）を同伴したグループだった。以下では、子どもへの環境教育の観点から、キャンプ活動が環境教育としての自然ふれあい体験としての行動や意識に反映されているかどうかについて、子ども同伴の有無による違いを考察する<sup>8)</sup>。

グループの人数は、子どもを同伴していないグループの大人の人数の平均 6.0 人に対して、子どもを同伴したグループは 3.8 人であり、同伴した子どもの人数平均は 2.6 人であった。また、子どもを同伴した回答者の平均年齢は 40.5 歳、同伴していない回答者は 39.4 歳、箱根滞在日数は、子どもを同伴したグループで 2.3 日、同伴していないグループで 2.2 日と、ほとんど変わりなかった。

### 5.2 訪問目的などの意識の比較

子どもを同伴した回答者グループ（以下、「子ども同伴」）と子どもを同伴していない回答者グループ（以下、「同伴なし」）とでは、箱根訪問やキャンプ体験の目的や意識に相違があるだろうか。箱根訪問目的では、両グループとも、「自然休息」「キャンプ」「親睦」が多いことには変わらないが、子ども同伴では「親睦」が有意に低く（ $p < 0.05$ ）、「動植物などの自然を観察するため」（以下、「自然観察」）が有意に高かった（ $p < 0.05$ ）（表 9）。

キャンプ場選定理由では、子ども同伴は、「自然の中で過ごす」（64.7%）が多く、「周囲の自然が良好」（48.4%）、「経費安い」（43.0%）、「共同による親睦」（30.8%）と続く。一方、同伴なしでは、「自然の中で過ごす」（49.4%）、「経費安い」（43.4%）、「共同による親睦」（38.6%）、「周囲の自然が良好」（32.5%）と順位に変化がある。「自然の中で過ごす」と「周囲の自然が良好」といった自然志向関連を選定理由としたのは、ともに子ども同伴が有意

に高かった ( $p < 0.05$ ) (表10)。

また、「不便さを体験」するた  
めとした割合も、子ども同伴が  
有意に高かった ( $p < 0.01$ )。  
宿泊施設(宿泊形態)は子ども  
同伴でもほとんど(65.6%)が  
設備の整ったケビン棟を利用し  
ているが、その割合は同伴なし  
(73.5%)よりも低い(表11)。  
ケビン棟利用者にケビン設備の  
必要性を聞いたところ、ベッド  
など寝具、炊事用具、食器など  
はいずれも必要性が高かった  
(いずれも90%前後)が、テレ  
ビや電話は低かった(いずれも  
40%台)。電話は現在では携帯  
電話があるため固定電話は必要  
とされないが、テレビの必要性  
が低いのは、自然の良好な場所  
で都会生活を離れた非日常的な  
体験をし、家族やグループの親  
睦を高めようとする利用者の要  
求の表れとも考えられる。こう  
した中で、クーラーと電子レン  
ジについては、子ども同伴と同  
伴なしとの間で差があり、とも  
に子ども同伴の方が必要性は低  
かった(クーラーは、子ども同  
伴52.1%、同伴なし63.3%、 $p < 0.05$ 、電子レンジは、子ど  
も同伴63.4%、同伴なし73.3%、 $p < 0.1$ )。このことから、子ども同伴のほうが人工  
的な環境から離れて、多少不便でも自然の中で過ごそうとする意識が高いと考えられる。  
また、オートキャンプの割合が子ども同伴で有意に高く ( $p < 0.01$ )、一方でフリーテン

表9 箱根訪問目的(複数回答)

|            | 子ども同伴あり |       | 同伴なし |       | 全体  |       |   |
|------------|---------|-------|------|-------|-----|-------|---|
| 自然の中で休息    | 151     | 68.3% | 56   | 67.5% | 207 | 68.1% |   |
| キャンプ       | 141     | 63.8% | 47   | 56.6% | 188 | 61.8% |   |
| グループ親睦     | 87      | 39.4% | 44   | 53.0% | 131 | 43.1% | * |
| 風景観賞       | 67      | 30.3% | 29   | 34.9% | 96  | 31.6% |   |
| 森林浴        | 72      | 32.6% | 22   | 26.5% | 94  | 30.9% |   |
| 温泉         | 38      | 17.2% | 21   | 25.3% | 59  | 19.4% |   |
| 自然歩道・登山など  | 31      | 14.0% | 18   | 21.7% | 49  | 16.1% |   |
| 釣り・山菜つみ    | 30      | 13.6% | 7    | 8.4%  | 37  | 12.2% |   |
| 自然観察       | 26      | 11.8% | 3    | 3.6%  | 29  | 9.5%  | * |
| 名物料理       | 4       | 1.8%  | 1    | 1.2%  | 5   | 1.6%  |   |
| 関所・美術館など見物 | 23      | 10.4% | 6    | 7.2%  | 29  | 9.5%  |   |
| ゴルフ・テニス    | 0       | 0.0%  | 1    | 1.2%  | 1   | 0.3%  |   |
| 業務・研修      | 0       | 0.0%  | 0    | 0.0%  | 0   | 0.0%  |   |
| その他        | 21      | 9.5%  | 7    | 8.4%  | 28  | 9.2%  |   |

注) 検定結果 \*\*\* :  $p < 0.001$ 、\*\* :  $p < 0.01$ 、\* :  $p < 0.05$ 、  
+ :  $p < 0.1$  (以下同様)

表10 キャンプ村選択理由

|                  | 子ども同伴あり |       | 同伴なし |       | 全体  |       |    |
|------------------|---------|-------|------|-------|-----|-------|----|
| 自然の中で長時間過ごすため    | 143     | 64.7% | 41   | 49.4% | 184 | 60.5% | *  |
| 周囲の自然が良好、静かなため   | 107     | 48.4% | 27   | 32.5% | 134 | 44.1% | *  |
| 経費が安い            | 95      | 43.0% | 36   | 43.4% | 131 | 43.1% |    |
| 共同炊事などを通じての親睦のため | 68      | 30.8% | 32   | 38.6% | 100 | 32.9% |    |
| ケビンが気に入っているため    | 52      | 23.5% | 25   | 30.1% | 77  | 25.3% |    |
| 都会生活から離れるため      | 44      | 19.9% | 20   | 24.1% | 64  | 21.1% |    |
| 何もしないでゆっくり過ごすため  | 29      | 13.1% | 12   | 14.5% | 41  | 13.5% |    |
| 散策・登山の拠点のため      | 20      | 9.0%  | 9    | 10.8% | 29  | 9.5%  |    |
| 同行者の選択           | 22      | 10.0% | 7    | 8.4%  | 29  | 9.5%  |    |
| 不便さを体験するため       | 21      | 9.5%  | 0    | 0.0%  | 21  | 6.9%  | ** |
| 他の施設が満室のため       | 7       | 3.2%  | 1    | 1.2%  | 8   | 2.6%  |    |
| その他              | 25      | 11.3% | 9    | 10.8% | 34  | 11.2% |    |

表11 宿泊施設(宿泊形態)

|         | 子ども同伴あり |       | 同伴なし |       | 全体  |       |    |
|---------|---------|-------|------|-------|-----|-------|----|
| ケビン棟    | 145     | 65.6% | 61   | 73.5% | 206 | 67.8% |    |
| オートキャンプ | 63      | 28.5% | 11   | 13.3% | 74  | 24.3% | ** |
| フリーテント  | 13      | 5.9%  | 11   | 13.3% | 24  | 7.9%  | *  |

トの割合は有意に低かった ( $p < 0.05$ ) (表 11)。これは、不便さや自然とのふれあいを望みながらも、低学年児童や幼児連れでのフリーテントでの生活は、親子ともに負担が大きいからと考えられる。

自然の中での長時間滞留（自然地長時間滞留）についての意識は、両者で有意差はないが、「好まない」とする割合が子ども同伴でやや高い。また、自然地長時間滞留ができない、あるいは好まないとする理由は、両者とも「旅行日程上余裕がない」とするものの割合<sup>4)</sup>がもっとも高く、「出かける時間的余裕がない」、「できるだけ多くの場所に行きたい」、「じっとしているのが苦手・落ち着かない」と続く。両者で差のあった理由には、「つまらない（飽きる）」( $p < 0.1$ )と「同行者が好まない」( $p < 0.05$ )があり、ともに子ども同伴のほうが高い割合である（表 12）。「その他」では「子ども（特に幼児）がじっとしているのを好まない」（自由記述）からとするものが多い（「その他」回答者の 75.0%）ことから、同伴の子どもが「つまらない（飽きる）」と感じ、同行者である子どもが「好まない」ために自然地長時間滞留ができないと解釈できる。

これらの結果からは、子ども同伴は自然の中で長時間過ごしたり、自然観察などを目的として、周囲の自然が良好で静かなキャンプ村を利用し、不便さを体験するなど、同伴なしに比べて自然志向が強いと判断される。一方で、あまり移動しないでのんびりと自然の中で長時間滞留することについては、特に幼児連れなどの場合に実現が困難と考えているものが多いことも明らかになった。

これら結果からは、子ども同伴は自然の中で長時間過ごしたり、自然観察などを目的として、周囲の自然が良好で静かなキャンプ村を利用し、不便さを体験するなど、同伴なしに比べて自然志向が強いと判断される。一方で、あまり移動しないでのんびりと自然の中で長時間滞留することについては、特に幼児連れなどの場合に実現が困難と考えているものが多いことも明らかになった。

### 5.3 キャンプ場での行動の比較

箱根での移動手段（複数回答）は、両者ともほとんどがマイカー（レンタカーを含む）利用（子ども同伴で 94.1%、同伴なしで 85.5%）だったが、検定の結果は有意差が認められた ( $p < 0.05$ )。また、定期路線バスの利用割合では同伴なしが有意に高く（子ども同伴 7.8%、同伴なし 15.7%、 $p < 0.05$ ）、逆にケーブルカー・ロープウェイの利用では子ども同伴が高かった（子ども同伴 16.4%、同伴なし 8.4%、 $p < 0.1$ ）。

表 12 自然地長時間滞留ができない理由

|              | 子ども同伴あり |       | 同伴なし |       | 全体 |                    |
|--------------|---------|-------|------|-------|----|--------------------|
| 旅行日程余裕ない     | 59      | 50.0% | 21   | 52.5% | 80 | 50.6%              |
| 出かける時間的余裕ない  | 35      | 29.7% | 15   | 37.5% | 50 | 31.6%              |
| 多くの場所に行きたい   | 30      | 25.4% | 9    | 22.5% | 39 | 24.7%              |
| じっとしているのが苦手  | 22      | 18.6% | 6    | 15.0% | 28 | 17.7%              |
| つまらない（飽きる）   | 20      | 16.9% | 2    | 5.0%  | 22 | 13.9% <sup>+</sup> |
| 同行者が好まない     | 18      | 15.3% | 0    | 0.0%  | 18 | 11.4% <sup>*</sup> |
| 日焼け・虫さされ気になる | 9       | 7.6%  | 5    | 12.5% | 14 | 8.9%               |
| 出かける金銭的余裕ない  | 8       | 6.8%  | 3    | 7.5%  | 11 | 7.0%               |
| お金をかけてもったいない | 5       | 4.2%  | 2    | 5.0%  | 7  | 4.4%               |
| 読書など屋外の必要ない  | 6       | 5.1%  | 0    | 0.0%  | 6  | 3.8%               |
| その他          | 11      | 9.3%  | 1    | 2.5%  | 12 | 7.6%               |

表 13 長時間滞在場所

|         | 子ども同伴あり |       | 同伴なし |       | 全体  |                   |
|---------|---------|-------|------|-------|-----|-------------------|
| テント・ケビン | 175     | 79.2% | 71   | 85.5% | 246 | 80.9%             |
| キャンプエリア | 27      | 12.2% | 11   | 13.3% | 38  | 12.5%             |
| 湖岸・樹林   | 17      | 7.7%  | 1    | 1.2%  | 18  | 5.9% <sup>+</sup> |
| その他     | 2       | 0.9%  | 0    | 0.0%  | 2   | 0.7%              |

宿泊施設（宿泊形態）は、子ども同伴も同伴なしも、ともに大半がケビン棟を利用して  
いた。一方で、オートキャンプの利用割合は子ども同伴が有意に高く（ $p < 0.01$ ）、逆に  
フリーテントでは同伴なしが有意に高かった（ $p < 0.05$ ）（表 11）。

これらの結果から、子どもを伴うグループでは一般の乗り合い電車やバスを乗り継いで  
の移動は引率の大人にも負担がかり、また騒がしさによる周囲への気兼ねからも、マイ  
カー利用によるオートキャンプを選択する傾向が読み取れる。一方で、子ども同伴にケー  
ブルカーやロープウェイの利用率が高いのは、子どものために日常生活では体験できない  
乗り物への乗車を体験させたい、あるいは登山の際に特に幼児連れでは徒歩による登山が  
困難という事情も考えられる。

キャンプ場において、もっとも長時間滞在した場所（単一回答）（長時間滞在場所）は  
両者ともほとんどがケビン・テント内で（表 13）、そこでの行動（長時間行動）は食事や  
会話が多かった（表 14）。これをもう少し詳細にみても、食事の割合は変わらないも  
の、会話では同伴なしが有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。さらに中心的長時間行動（単一  
回答）では、食事では子ども同伴が有意に高く（ $p < 0.01$ ）、逆に会話では同伴なしが有  
意に高かった（ $p < 0.01$ ）。これは、子ども同伴では会話というよりも、食事そのものに  
時間を割いて、その中で子どもとの団らんを楽しんでいる、あるいは子どもの食事時間が  
長いことなどのためと考えられる。一方で、同伴なしでは前述のとおり、多くがグループ  
での親睦自体を箱根訪問の目的として  
おり（53.0%、 $p < 0.05$ ）、このこと  
が会話の割合が有意に高い結果にも  
なっている。

また、湖岸・樹林を長時間滞在場所  
と回答した割合は同伴なしのほうが高  
い（ $p < 0.1$ ）ものの、長時間滞在場  
所での行動では散策の回答が子ども同  
伴のほうが高かった（ $p < 0.1$ ）。これ  
も前述の自然地長時間滞留意識のと  
おり、子どもがじっとしていないことか  
ら散策はするものの、湖岸・樹林内  
でとどまることはできないということだ  
ろう。自然とのふれあいの観点から  
は、湖岸や樹林にもっと留まり、自然  
を見たり、自然を相手に遊んだりする  
ことも望まれる。

表 14 長時間行動（上段）と中心的長時間行動（下段）

|       | 子ども同伴あり |       | 同伴なし |       | 全体  |       |   |
|-------|---------|-------|------|-------|-----|-------|---|
| 食事    | 195     | 88.2% | 73   | 88.0% | 268 | 88.2% |   |
| 会話    | 157     | 71.0% | 70   | 84.3% | 227 | 74.7% | * |
| 散策    | 64      | 29.0% | 16   | 19.3% | 80  | 26.3% | + |
| ゲーム   | 46      | 20.8% | 22   | 26.5% | 68  | 22.4% |   |
| 読書    | 22      | 10.0% | 7    | 8.4%  | 29  | 9.5%  |   |
| 昼寝    | 19      | 8.6%  | 8    | 9.6%  | 27  | 8.9%  |   |
| 釣り    | 9       | 4.1%  | 5    | 6.0%  | 14  | 4.6%  |   |
| 思索    | 9       | 4.1%  | 2    | 2.4%  | 11  | 3.6%  |   |
| 何もしない | 7       | 3.2%  | 3    | 3.6%  | 10  | 3.3%  |   |
| 仕事    | 2       | 0.9%  | 0    | 0.0%  | 2   | 0.7%  |   |
| その他   | 15      | 6.8%  | 5    | 6.0%  | 20  | 6.6%  |   |

|       | 子ども同伴あり |       | 同伴なし |       | 全体  |       |     |
|-------|---------|-------|------|-------|-----|-------|-----|
| 食事    | 134     | 60.0% | 33   | 39.8% | 167 | 54.9% | **  |
| 会話    | 42      | 19.0% | 36   | 43.4% | 78  | 25.7% | *** |
| 散策    | 20      | 9.0%  | 3    | 3.6%  | 23  | 7.6%  |     |
| ゲーム   | 5       | 2.3%  | 3    | 3.6%  | 8   | 2.6%  |     |
| 釣り    | 5       | 2.3%  | 2    | 2.4%  | 7   | 2.3%  |     |
| 読書    | 3       | 1.4%  | 1    | 1.2%  | 4   | 1.3%  |     |
| 何もしない | 3       | 1.4%  | 1    | 1.2%  | 4   | 1.3%  |     |
| その他   | 9       | 4.1%  | 4    | 4.8%  | 13  | 4.3%  |     |

## 6. 総合考察とまとめ

本調査の対象であるキャンプ場利用者は、「芦ノ湖キャンプ村」を宿泊地として選定した理由として、自然の中で長時間過ごすためであり、周囲の自然が良好で静かなことをあげていた。それではこれら利用者は、自然志向が強いといえるだろうか。箱根訪問目的の複数回答では「自然の中で休息するため」がもっとも多く、利用者は自然を求めていることが明らかであるが、もっとも中心になる目的・理由（単一回答）となると、「自然の中で休息するため」というよりも、「キャンプ」活動自体や仲間との「親睦」を目的とするものが多く、「キャンプ」と「親睦」を合わせると約3分の2を占める。

宮本（2008）によれば、キャンプはその性質上、自然の豊かな場所で行われることが多く、自然とふれあう機会を提供する場であるが、そこでの目的が自然とかわること自体にある場合を「自然とのふれあい」とし、自然とのふれあいを目的に含みつつも、自然を集団訓練やレクリエーションの場として利用するものは「野外活動」というべきであるという。これに従えば、キャンプ場利用者の約3分の2は「自然とのふれあい」よりも「野外活動」を目的としていることになる。スキー場では、スキーヤーに比べてスノーボーダーは「自然とのふれあい」よりも「仲間とのふれあい」を目的としている割合が高いという（森本ら 2001）。

キャンプ場においては、スキーヤーとスノーボーダーほどの表面的な利用形態の差異はないが、本研究からは、①自然とのふれあいを強く求める利用者（自然ふれあいタイプ）、②キャンプ活動自体を目的とする利用者（キャンプ活動タイプ）、③グループ内での親睦を図ることを目的とする利用者（グループ親睦タイプ）、の3タイプの存在が明らかになった。なお、3タイプでの子ども同伴グループの割合は、それぞれ73.9%、75.8%、70.8%であり、有意差はなかった。

キャンプ場での行動としては、ほとんどの利用者がケビンやテント内で長時間を過ごし、そこでは食事に時間を費やしていた。一方で、①自然ふれあいタイプは湖岸や樹林など自然の中でんびりと過ごし、②キャンプ活動タイプでは野外キャンプエリアでバーベキューをするなどキャンプ活動そのものを楽しみ、③グループ親睦タイプでは仲間と会話にいそしむ、といった割合が高いなど、他のタイプと比較するとそれぞれ特徴的な行動パターンが見受けられた。しかしこれは、各タイプの箱根訪問あるいはキャンプ場利用の目的からみて当然の行動ともいえる。そこでさらに、自然とのふれあいの機会を提供する場としてのキャンプ場の利用者が、意識するかしないかを問わず、自然とのふれあいに連なるような意識と行動を有しているかを考察する。

3タイプの中ではもっとも自然志向性の強いと考えられる自然ふれあいタイプの利用者は、他のタイプよりも自然地長時間滞留を好んでおり、また周囲の自然が良好で静かであ

ることからキャンプ村を選定したとする割合が他のタイプよりも高い（有意差あり）。さらにキャンプ場での行動も、長時間滞在場所としての湖岸・樹林、および長時間行動としての散策の割合がもっとも高いなど、自然の豊かな場所で長時間1カ所に留まってのんびり過ごすといった自然志向性が高いことは明らかである。しかしこれは相対的なものでもあり、実際には、長時間滞在場所として湖岸・樹林を選択したのは10.1%に過ぎず、したがって長時間滞在場所での行動（長時間行動）（複数回答、単一回答とも）でも、散策の割合は、食事はもとより、会話よりも少なくなっている。なお、3タイプ間での子ども同伴の有無による有意差はなかったことから、これらの差は子ども同伴の有無に起因したのではないと考えられる。

自然志向の高い利用者でも、必ずしもこのように湖岸・樹林などの自然の中で長時間滞在して散策などをすることができない原因には、いくつかの理由が推測されるが、大きな理由の一つとしては旅行日数（休暇日数）の不十分さがあげられよう。自然地に長時間滞留できない理由として、3タイプとも旅行日程が短いこと、できるだけ多くの場所に行きたいことをあげているが、今回の箱根滞在日数は平均で2.3日だった。キャンプ村滞在日数は大半（67.9%）が1泊だけであることを考慮すると、どうやらキャンプ村での生活は、夕方に到着してバーベキューなどの食事をし、翌日午前中（チェックアウトは午前10時）には出発していくことになりそうだ。これでは、自然の中に滞在した実感は味わえないのではないだろうか。

また、子ども同伴の有無による比較からは、子ども同伴のほうが、自然観察などのために箱根を訪問し、「自然の中で過ごす」ためや「周囲の自然が良好」だからとしてキャンプ村を宿泊地に選定する割合が有意に高いなど、自然志向が強いといえる。また「不便さを体験」するためにキャンプ村を選定し、ケビン棟利用者でもクーラーは必要ないとする割合が子ども同伴なしよりも高いなど、子ども同伴のほうが人工的な環境から離れて多少不便でも自然の中で過ごそうとする意識が高いともいえる。

しかし、自然の中の1カ所に長時間滞留するといった行動パターンは、わずかな差だが子ども同伴のほうが敬遠する割合が高い。この理由は「旅行の日程上」あるいはそもそも「出かける時間的」な余裕がないからであり、さらに「できるだけ多くの場所に行きたい」からだった。また、特に子ども同伴では「つまらない」と感じ、「同行（の子ども）が好まない」（いずれも、同伴なしより有意差（あるいは高い傾向）あり）からだった。これは、子ども同伴の箱根での移動乗り物でマイカーが多く、定期路線バスが少ないことや、湖岸・樹林内での滞留は少なく、散策が多いなどのキャンプ場での行動などにも表れている（いずれも有意差（あるいは傾向）あり）。つまり、子どもがじっとしておらず、1カ所では飽きてしまうからと考えられる。

一方で欧米人家族のキャンプ村利用者の多くは、遅い時間の朝食後、子どもたちは湖岸

や樹林内で水遊びや虫取りなどに戯れ、夫婦はケビンのベランダでゆったりと周囲の自然を眺めてコーヒーを飲みながら、会話あるいは読書で1日を終えて、再びケビンで夕食をとるといふ（高橋 2006）。

幼児、児童の自然体験は子どもの発達にとって重要であるが（James et al. 2008、井上 2009）、その機会は提供する親の熱意はもちろん、収入にも影響されるという（James et al. 2008）。キャンプ場を自然とのふれあいの機会提供の場とするためには、施設の整備のみならず、日程的にも十分ゆとりのある休暇を取り、親子ともに自然とのふれあいを満喫することが可能となるような社会的な体制や生活意識も必要となろう。

## 7. おわりに

身近な自然が喪失していく中で、都会生活から逃れて自然とのふれあいを求めてキャンプ場を利用する傾向は増大しているが、同時にオートキャンプの流行など、ややもするとファッションとなる側面もはらんでいる（高橋 2010）。本研究で明らかになったようなキャンプ活動そのものを楽しんだり、仲間との交流親睦のためにキャンプ場を訪れたりする利用者が増加することにより、場合によっては自然とのふれあいの場としての機能と自然環境を損ないかねない懸念も生じる。

児童は、遊びとしてのキャンプに参加するものであり、キャンプは環境教育ではない（佐野 1980）とはいえ、子どもたちにとってもキャンプ場は自然とのふれあいの機会を提供する場であることには違いない（James et al. 2008）。実際、本研究のキャンプ場利用者も、同伴した子どもには自然とのふれあいの機会を与えようとする傾向が強かった。前述のキャンプ村での欧米人の家族が、親と子それぞれの自然とのふれあいを楽しむ姿には、教育プログラムでは味わえない、生活の中に根差した自然志向が反映されているように思う。

本研究は、キャンプ場における利用者の自然志向に関連する意識と行動の調査だったが、他のキャンプ場や他のシーズンとの比較も必要である。また、そもそも「自然とのふれあい」の日常生活および環境教育における意味と位置付けなどについて、さらに明確にする必要がある。さらに、自然とのふれあいについての欧米人と日本人との意識や生活の比較も必要である。これらについては、今後の研究課題としたい。

最後ではあるが、調査にご協力いただいた神奈川県および(株)神奈川県観光協会、さらに芦ノ湖キャンプ村の関係者の方々に感謝申し上げます。

## 注

- 1) 調査時の2009年の箱根地域年間利用者数は2,067.7万人、うち宿泊者は472.7万人であり、キャンプ場・コテージの宿泊者は5.1万人だった(箱根町資料)。
- 2) 芦ノ湖キャンプ村資料による。
- 3) 「3. 結果」の「3.1 利用者属性」、「3.2 利用者の目的意識」の前半、および「3.3 キャンプ村の利用」における比率集計では330を母数とし、回答未記入項目(欠損値)は「不明」として処理した。また、平均年齢、平均グループ人数、子ども同伴率および複数回答の場合の回答率などでは、欠損値は除外して回答データ数(回答者数)を母数として算出した。その他では、宿泊形態による自然ふれあい意識の違いなどを考察するため、キャンプ村に宿泊した回答者のみを解析対象とし、さらに主要な解析項目である前述のアンケート質問項目のキャンプ村宿泊施設種類、選択理由、長時間滞在場所と行動、箱根訪問目的、自然滞在意識などについて欠損値のあるデータは除外した。この結果、集計解析は304を母数とする。
- 4) 自然地長時間滞在が「できない」、または「好まない」とする理由を示した回答者に対する割合。
- 5) 内閣府(2010.3.29更新)、自然の保護と利用に関する世論調査(2006年実施)、入手先<<http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-sizen/2-1.html>>、(参照2010-4-10)
- 6) 設問の選択肢の表現から、同一内容と考えられる項目で比較した。なお、世論調査の「登山、ハイキング、海水浴、キャンプなどを楽しむため」は、本調査の「自然歩道・登山」または「キャンプ」のどちらかを選択したものの割合と比較した。
- 7) 以下の考察では、自然体験との関連から、「自然ふれあいタイプ」、「キャンプ活動タイプ」、「グループ親睦タイプ」の順に論じ、概要(Abtract)および各表では、それぞれを「タイプA」、「タイプB」、「タイプC」とした。
- 8) 標本数304の内訳は、子ども同伴ありn=221、同伴なしn=83である。

## 引用文献

- 愛甲哲也、小林昭裕，“大雪山国立公園における登山利用者からみたキャンプ場の混雑感評価と関わる要因”，『造園雑誌』，1993，56(5)，pp.169-174
- 愛甲哲也、浅川昭一郎，“山岳地のキャンプ場におけるテントの設置が混雑感に及ぼす影響について”『ランドスケープ研究』，1998，61(5)，pp.627-630
- 遠藤浩，“キャンプ経験が小中学生の環境保全意識に及ぼす影響”，『京都教育大学環境教育研究年報』，2，1994，pp.43-48
- 降旗信一、宮野純次、能條歩、藤井浩樹，“環境教育としての自然体験学習の課題と展望”，『環境教育』，19(1)，2009，pp.3-16
- 井上美智子，“幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題”，『環境教育』，19(1)，2009，pp.95-108
- 伊東静一、小川潔，“自然保護教育の成立過程”，『環境教育』，18(1)，2008，pp.29-41
- James, Penny A; Henderson, Karla A; Garst, Barry, “Camp Directors’ Belief Regarding Nature-Deficit Disorder and Camp”, The Camping Magazine, 81(4), 2008, pp.34-39
- 河内勇樹、嶽山洋志、美濃伸之，“幼稚園および保育所における五感を通じた自然体験の現状”，『ランドスケープ研究』，74(5)，2011，pp.647-650
- 国立青少年振興機構，“青少年の体験活動等と自立に関する実態調査”報告書，国立青少年振興機構，2011，入手先<[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/64/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/64/)>、(参照2011-11-09)
- 宮本佳範，“自然との触れ合いの環境教育としての意義に関する一考察 —レジャーおよび日常生活における自然との触れ合いとの比較から—”，『人間文化研究』，9，2008，pp.69-81
- 森本崇資、永吉宏英、森田清美、横山誠，“スキーヤーとスノーボーダーにおける環境意識に関する研究 —活動タイプの違いに着目して—”，『大阪体育大学紀要』，32，2001，

pp.25-31

- 永吉宏英, 森本崇資, “アウトドアレジャー参加者の環境意識に関する研究：登山とオートキャンプの活動タイプの違いに着目して”, 『日本体育学会大会号』, 52, 2001, p.223
- 西島大祐, “幼児教育者の養成を目的とした組織キャンプの効果に関する一考察”, 『鎌倉女子大学紀要』, 15, 2008, pp.101-109
- 小田梓, 坂本昭裕, “長期冒険キャンプに参加した不登校児の体験の意味づけに関する研究”, 『筑波大学体育科学系紀要』, 33, 2010, pp.227-231
- 岡本理子, “幼児期における自然体験の環境教育的意義の一考察 —秋田・森の保育園の事例から—”, 『桜美林論考 自然科学・総合科学研究』, 1, 2010, pp.39-48
- 岡村泰斗, “野外教育から見た環境教育・冒険教育”, 『青少年問題』, 47 (8), 2000, pp.12-19
- 佐野豪, 『子どものための野外教育 —教育キャンプの今日的課題と実際—』, 東京, 泰流社, 1980
- 杉浦高志, 糸長浩司, 藤沢直樹, “丹沢大山地域における登山・キャンプ利用者の環境意識に関する研究”, 『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 2005, pp.499-500
- 鈴木理恵, 土肥博至, “キャンプ場利用者の特性と環境条件 その1 利用者の特性”, 『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 1994, pp.585-586
- 高橋進, “自然の中での長時間滞留 —箱根のケーススタディから—”, 『余暇学研究』, 7, 2004, pp.45-52
- 高橋進, “キャンプ場利用と自然の中での長時間滞在 —箱根・芦ノ湖キャンプ村の事例—”, 『余暇学研究』, 9, 2006, pp.20-26
- 高橋進, “「自然余暇」の生成と危うさ”, 『レジャースタディーズ —余暇研究の転回—』, 日本余暇学会, 2010, pp.33-44
- 高山昌子, “大学生の組織キャンプの効果に関する一考察”, 『太成学院大学紀要』, 11, 2009, pp.85-95
- 吉野美紗樹, 古谷勝則, 鈴木薫美子, “大学生に聞いた児童期の外遊び・自然体験とその活動場所”, 『ランドスケープ研究』, 74 (5), 2011, pp.591-596